

仏の願い

平成25年 西雲寺だより 冬号(34号)



10/17 武周の方々による参道ライトアップ試験(給食室の廃油を使ったエコキャンドル)

当山

御正忌報恩講の

ご案内

11月28日(木)～30日(土)

28日お逮夜(2時)

お初夜(7時) (武周お講)

29日お日中(10時)

大逮夜(2時) (御伝鈔)

お初夜(7時) (御伝鈔)

30日満日中(10時)

法話 福井 奥田順誓師

(29日より)

お誘い合わせの上
ご参詣下さいますよう
ご案内いたします

親鸞聖人のご生涯

ご往生

明法房の往生

親鸞聖人はお弟子の一人、明法房（みょうほうぼう）が往生されたという知らせを受けて、次のようなお手紙を関東の門弟に送っておられます。

なによりも明法房が往生の本意を遂げましたことは、浄土往生を志している常陸在住の人々にとつて、まことによるこぼしいことでありませう。往生といえるのは、凡夫があれこれとはからつてできるものではありません。りっぱな智者がはからい得るものでもありませんし、大乘、小乗の聖人ですらあれこれやとはからわれないで、ただひたすら阿弥陀仏の願力にまかせて、はじめて往生することができのです。（一部抜粋、口語訳、聖人八十歳）

親鸞聖人は明法房がなくなつたことを「まことによるこぼしいこと」といわれ、他のお手紙では「かえすがえすうれしうそろう」と述べられています。聖人はなぜ悲しむべきことを、このような表現をされたのでしょうか。明法房とは、『御伝鈔（ごんでんしょう）』でお聞きになつたことがあると思われませんが、聖人が常陸（ひたち）の稲田でお念仏の教えを広めておられた頃、弁円という山伏であつたのです。彼は聖人の名とお念仏の繁盛に敵意をもち、聖人を亡

きものにしようと思つた板敷山（いたじきやま）で度々待ち伏せをしていたのです。ところがなかなかその機会を得られず、ついに聖人の住む稲田の草庵にのり込みましたが、聖人の尊顔に出会つた瞬間、その害心はたちまち消え、涙を流してその非を悔い、たちどころに聖人に帰依して、明法房という法名を与えられ、お念仏の人となつたのです。その明法房がお念仏とともに往生を遂げたことは「かえすがえすうれしう」といわれるのです。そしてまたそのことは、「浄土往生を志している常陸の国の人々にまことによるこぼしいこと」と述べておられるので

す。聖人は明法房が亡くなつたことを決してうれしうとかよるこぼしいといわれたのではなく、明法房が自分の今までの罪を回心懺悔して浄土往生を遂げたことをよるこぼしいことといわれたのです。そのことは同じ念仏の道を歩む常陸の御同行御同朋たちに正しい道を指し示し、大きな励みになつたといわれるのです。回心懺悔（きんげん）して念仏の道に入ることが邪見憍慢（きょうまん）な私たちにできることでなく、明法房はのちの私たちに大切なことを教えているのです。

生死無常のことわり

聖人八十七、八歳の頃、京都から関東にかけて大変な天変地異があり、多くの餓死者を出したようです。その頃、聖人が関東のお弟子に送つたお手紙です。

なにより去年、今年と多くの老少の人々の死に遭いましたことは、深い悲

しみです。けれども、生死無常のことわりは、すでに詳しく如来が説いておられることなので、改めて驚かされるには及びません。ともあれ、私、親鸞においては、臨終の善し悪しを問うことはしません。信心の定まつた人は、阿弥陀仏のお誓いを疑う心がないのですから、必ず往生する身と決まっています。だからこそ愚かでも無知な人も、何の心配もなく臨終を迎えることができるのです。如来の御はからいによつて往生するので、決して学者ぶつた議論をなさないで、浄土往生を遂げられて下さい。（一部抜粋、口語訳、聖人八十八歳）

聖人は天変地異によつて、多くの人の死に遭つたことについて「生死無常のことわりは、すでに詳しく如来が説いておられることなので、改めて驚かされるには及びません」と述べておられる、一見冷たく感じられるおことばです。しかし親鸞聖人という方は、これまで、凶作や疫病で多くの人が死んでいくのを目の当たりにして、悩み苦しんだ方です。聖人四十二歳のときには常陸へ向かう途中の佐貫（さぬき）という所で飢餓に苦しむ人々をどうにかしたいという思いから「三部経読誦（どくじゆ）」を思い立つたけれども、自力の執心であると思ひ知らされて中止したといわれています。また五十九歳の時には熱にかされて目の前に「大無量寿経」の文字が一字一句はつきりと浮かび上がってきたけれど、自力の執心は根深いものだどハツと気付いて目が覚めて熱も下がったといわれています。

本当に人を助けるとか、救うということ
は私たち凡夫にはできないことです。それ
ができるのは仏さまだけです。私たちは日
頃から聴聞し後生の一大事に心をかけ、生
死無常のいのちを生きていることいただい
ていくばかりなのです。

お手紙には、当時臨終の善し悪しを問う
たり、学問沙汰をして人を迷わすようなこ
とをする人がおり厳しく戒めておられます。

其(それがし)親鸞閉眼せば
賀茂川に入れて魚にあたうべし

このお言葉は、聖人が命終る日も遠くな
いと感ずるようになった最晩年に呟くよう
に語った遺言の趣をもったものと言われて
います。聖人が命終えた場所は、聖人の弟、
尋常僧都(じんうそうず)の住いである善法院
で、遙か東に賀茂川を望むことができる辺
りです。聖人には生涯忘れることのできな
い賀茂川の光景があるのです。それは聖人
が得度された九歳のとき、都は大飢饉に見
まわれ、地獄さながらの惨状を呈したので
す。鴨長明の『方丈記』には、都には餓死
者が溢れ、放置された遺体の腐臭と腐り果
てていく哀れな姿は、目も当てられない光
景であると書かれています。

仁和寺の隆暁(りゅうぎょう)法印はうち棄て
られたままに朽ち果てていく人びとを哀れ
に思い、弟子たちとともに遺体の顔に「阿」
の字を書いて形ばかりの巾いをして歩いた
ところ、五月、六月のふた月、洛中だけで
その数が四万二千三百を超えたといわれま
す。賀茂川には無数の遺体が打ち棄てられ、
流されていったのです。九歳の少年の胸に

焼きついた、無残な人間の死、それが聖人
の人生に大きな影響を与えたといえるでし
ょう。

ひとたび疫病や飢饉にみまわれたとき、
生きのびる術もなく餓死するほかなかった
無数の人たち、「某、親鸞閉眼せば、賀茂川
に入れて魚にあたうべし」というおことば
は、その人たちの命終ったところに自分も
棄ててほしいという、晩年の聖人の身に動
いていた切実な願いの表明だったのです。

親鸞聖人ご往生

弘長二年(一二六二年)旧暦十一月下旬
の頃、底冷えの続く京の冬、聖人は身の不
調を覚えて床につかれました。ほぼ一週間
ほどの病臥ののち、ついに十一月二十八日
の昼頃、親鸞聖人は長い九十年のご一生を
終えられました。その有様を『御伝鈔』は
美しい文章で次のように伝えていきますので
原文のまま記します。

聖人、弘長二年、仲冬(ちゅうとう)下旬
の候より、いささか不例の氣まします。
それよりこのかた、口に世事をまじえ
ず、ただ仏思のふかき事をのぶ。声に
余言をあらわさず、もっぱら称名たゆ
ることなし。しかるに同じき第八日午
の時、頭北面西右脇(ずほくめんさいいうきよ
う)に臥したまいて、ついに念仏の息た
えおわりぬ。時に頽齡九旬(たいれいくじ
ゆん)に満ちたまう。

聖人のご往生のすがたを、一切飾ること
なく単々と述べられています。そこに何か
厳かなものを感じるので。それとともに
聖人のご往生は私たち凡夫の往生のすがた

を示して下さったものと有難くいただける
のです。

臨終を看取ったのは、末娘の覚信尼、越
後からかけつけた三男の益方(ますかた)入道、
門弟では越後高田の顕智房、遠江(とおと
うみ)池田の専信房らでした。翌二十九日
に東山の延仁寺で火葬にふし、三十日に鳥
辺野(とりべの)の北の大谷に納骨して墓標を
建てました。

一人いて喜ばば二人と思うべし

聖人にはご遺言として伝えられる次のよ
うなお言葉が残されています。
我が歳きわまりて、安養浄土に還帰(げ
んきす)というとも、和歌の浦曲(うらわ)
の片男波の、寄せかけ寄せかけ帰らん
に同じ、一人居て喜ばば二人と思うべ
し、二人居て喜ばば三人と思うべし、
その一人は親鸞なり

聖人が往生されて七五〇年、聖人は九十
年という長い人生をかけて、迷い悩み苦し
んで一生を終えていかなければならない私
たち凡夫に、まことの仏道が成就すること
を示して下さいました。それは既に如来の
方から回向成就して下さいている「本願を
信じ念仏申さば仏になる」という往生浄土
の仏道です。私たちはその仏道を我が身に
示して、聖人の尊いご恩徳に報いさせてい
ただかなければなりません。

私たちがお念仏申すところに、親鸞聖人
はいつも寄り添って下さるのです。

(住職)

ほんこさん 縁の下の力持ち

本当にありがとうございます



お御堂の掃除



エコキャンドルチーム



おみがき



幕つり



お華立て



境内の掃除



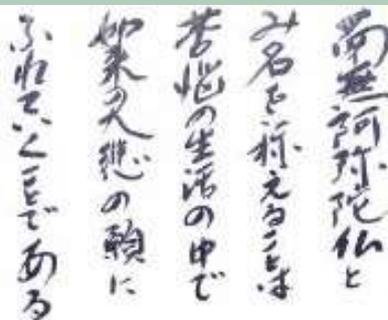
大台所



やきまんじゅう



山門掲示板



南無阿彌陀仏と
 名を稱えることは
 苦悩の生活の中で
 如來又悲の頼に
 ふねてくまてある

今日、お念仏の声が聞かれなくなりました。さ
 びしいことです。お念仏は私たちの方から、仏さ
 まに向かって何かをお願いしたりすることでは
 ありません。迷いの衆生を救いたいという如來さ
 まのたいなる願いが、南無阿彌陀仏という六字の
 み名となつて、どうか念仏申して、わが国に生れ
 てくれと呼びつづけていて下さるのです。念仏申
 すということは、親の願いを受けとるといふこと
 なのです。親には三種あるといわれます。一つは
 生みの親、二つ目は育ての親、三つ目は名となつ
 た親です。名となるということは、うれしい時、
 悲しい時、子供が名を呼んでくれる親になること
 です。子が親の名を呼ぶとき、親のこころにふれ、
 親の愛につつまれるのです。念仏の声が聞かれな
 くなつたというのは、私たちがまことの親を見失
 ったということです。(住職)

弥陀をよぶ わが声は 御仏の
 われをよびます 御声なりけり (甲斐和里子)

西雲寺 宗祖親鸞聖人 750 回大遠忌



西雲寺のおちごさん

日にち H26 年 4 月 27 日
 (日) 午後 1 時開式
 場所 武周町内を 200m ほど
 歩いて西雲寺の本堂へ
 お参りします
 費用 おひとり 7,000 円

西雲寺のご門徒でなくても
 ご親戚やお知り合いの方も
 ご一緒にどうぞ

申込者増加中！
 H26 年 2 月末日締切

おかみそり

申し込まれる
 方が次々と増
 えています！



祝！人生
 2 度目の
 誕生日

き きょうしき
西雲寺で帰敬式 (おかみそり)

日にち H26 年 4 月 27 日 (日) 午前 8 時開式
 場所 武周 西雲寺本堂
 資格 満 8 歳以上の方ならどなたでも
 費用 20 歳以上 20,000 円
 19 歳以下 10,000 円 (小学生は 5,000 円)

H26 年 2 月末日締切

在所の方は世話方さんまで 遠方の方は直接当院までお申し込み下さい
 すでに申し込まれた方には、後日詳細をご案内いたします

宗祖親鸞聖人 750 回大遠忌

平成 26 年 4 月 27 日 (日)

主なスケジュール

7:30 頃	帰敬式受式者集合	
8:00	帰敬式(おかみそり)	おかみそり 人生 2 度目の誕生日を共に迎えたいしましょう
10:00 頃	御内陣修復法要	修復法要 修復された御内陣の美しさは、私たちが受けている恩の深さと尊さです。
12:00 頃	おとさき	おとさき どなた様もおとさきを共にして、ご縁を喜び合いましょう！
13:00 頃	庭儀式(おちごさん)	お稚児さん 参加された方は、その後の法要にもぜひおそろいでお参り下さいね。
14:00 頃	宗祖 750 回大遠忌法要	
16:00 頃	日程終了	750 回忌 親鸞聖人が往生されたのは鎌倉時代の 1262 年でした。それからずっとご法事を続けてこられた先人のお気持ちを、共に聴かせていただきますよう

発行
真宗仏光寺派 専念山 **西雲寺**
住職 護城一寿
筆頭総代 吉川芳弘
編集責任者 護城一哉
〒910-3523 福井市武周町 5-2
電話 0776-97-2138
メール kmgojo@mx3.fctv.ne.jp
ホームページ <http://arukou.net/>

次世代の方、分家された方に！
お手元に 2 部届いた時には、ぜひご活用下さい。

みなさんの声 大募集！
原稿や作品はもちろん、ご意見、ご感想など、どしどしお寄せ下さい。郵送でもメールでも構いません。お待ちしております。